

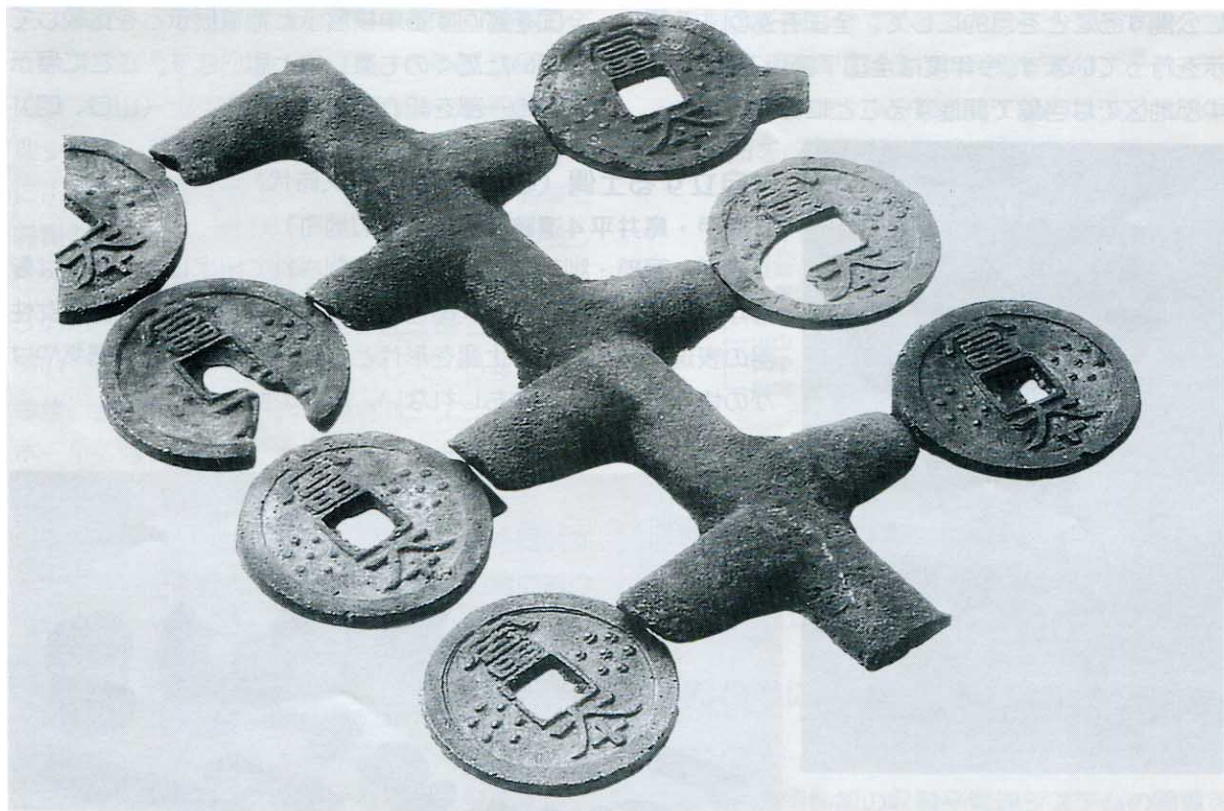


博物館だより

第48号

1999.8.31

Nagano City Museum



最古の貨幣

「^ふ富^{ほん}本^{せん}銭」—^{いさお}鑄^{つぼ}棹と銅銭—

奈良県飛鳥池遺跡は、飛鳥寺の東南に接した谷あい^あに営まれた古代（7世紀後半～8世紀初め）の工房跡です。出土した富本銭は、完形に近いものが6点ありましたが、いずれも周囲に鑄張り（鑄型からはみ出した部分）やセキ（銅の流路の枝部が固まったもの）の切断痕が残るなど、仕上げ工程に至らなかった不良品の合わせて40点ほどでした。直径は平均24.4mm、完形品の平均重量は4.59g。

『日本書紀』には、天武天皇12年（683年）に「今より以後、必ず銅銭を用いよ。」との記述があります。この銅銭が何か、ながらく大きな謎でした。1998年の飛鳥池遺跡の調査で、天武の銅銭が「富

本銭」であることが明らかになったのです。これにより、和同開珎より古い最古の貨幣として一躍マスコミの脚光をあびました。

また、富本銭の鑄造にかかわる鑄型・鑄棹・坩堝・フイゴの羽口・鑄放し銭のバリ・セキ・炭など、大量の一括資料が発見されています。これらの資料には、鑄造から整形・完成までの全過程にかかわる遺物が含まれています。鑄造にかかわる炉跡はおびただしい数になり、長期にわたって国家的に大量鑄造に取り組んだ姿がとらえられています。これらの資料は新発見考古速報展に出品します。

（山口 明）

「発掘された日本列島'99 ～新発見考古速報展～」

開催

全国で年間8,000件を数える埋蔵文化財の発掘調査が行われ、従来の歴史を書きかえる新しい成果が多数蓄積されています。5年前より、発掘調査の成果の中で特に注目される出土品を中心に一般に公開することを目的にして、全国を巡回する展示を行っています。今年度は全国7箇所で開催し、中部地区では当館で開催することになりました。

巡回展示は、全国47遺跡約450点を時代ごとに展示します。また、当館が企画する地域展示は、「過去が見えてきた！ー長野県内の最新発掘情報ー」と題して、約70遺跡200点を時代ごとに展示します。全国を巡回する中核展示と地域展示とを比較して見ていただくのも楽しいと思います。ここに展示資料の一部を紹介します。（山口 明）



◀自立する土偶（板状土偶）《縄文時代》

有戸・鳥井平4遺跡（青森県野辺地町）

頭部・胸部・脚部が意図的に5分割されて出土した。頭部は髪形が表現され、顔面には入墨と思われる模様がある。乳房・女性器の表現がみられる。土偶を形代として損壊することで病気やけがの快方を祈ったのかもしれない。高さ32cm。



土製模造品（形代）《古墳時代》▶

明ヶ島5号墳（静岡県磐田市）

方墳の盛土中および周溝中から発見され、特に古墳築造面で集中的に出土した。現在7,000点以上を数える。土製模造品には人形・動物形・武具形・装飾品形・什器形・農漁具形・紡織具形・楽器形などがある。人々の願いや祈りを託し、神へ捧げる「まつりの道具」として奈良時代初期まで使われた。



◀ 各種木製品《弥生時代》

姫原西遺跡（島根県出雲市）

さまざまな形の容器や蓋・太陽と月の表現のある琴の側板・削物や指物で作られた腰掛け・戈形木製品・木鏃・ライフル銃の銃身のような長さ91.4cmの弩形木製品（弓の一種）などが旧河道から出土した。

収蔵品管理システムが新しくなりました

【はじめに】

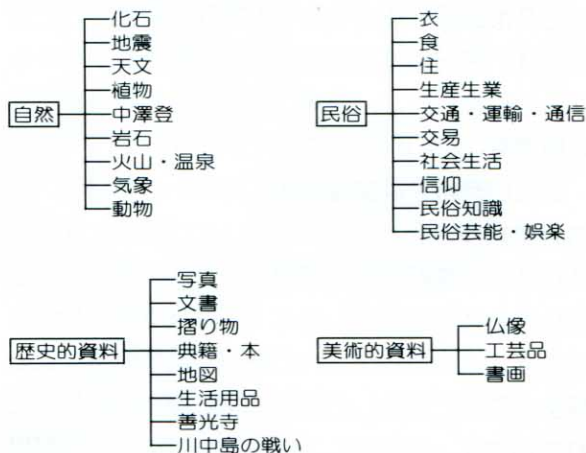
博物館には、展示品以外にもたくさんの収蔵品があります。従来は、資料カードによって収蔵品を管理していましたが、そういった収蔵品管理方法は、データ管理の繁雑さや、来館者が閲覧しにくい欠点がありました。そこで、6年前（1993年）にコンピュータを導入し、デジタルでの収蔵品管理システムを構築しました。コンピュータの導入によって、来館者はコンピュータを使って簡単に閲覧できるようになりました。当時は最新のコンピュータを来館者用に設置したのですが、コンピュータのハードウェア及びソフトウェアは日進月歩の勢いで進歩していきました。そして、6年たった今年、当館のシステムが一新され、エントランスホールにはタッチパネル式の20インチモニターが来館者用として更新されました。

収蔵品管理システムは、来館者に情報を提供するのはもちろんですが、基本的には博物館における収蔵品の受け入れ、登録、貸し出し履歴、資料情報などを記録するためのものです。現在博物館では考古、歴史、民俗、自然の各分野の膨大な資料を収蔵しています。資料点数が多くなるとすべてを詳細に管理するのはたいへんになりますが、それを容易にしてくれるのがコンピュータによる収蔵品管理システムです。それは、コンピュータが必要な情報を必要なだけ正確にかつ迅速に提供してくれるからです。



【閲覧システム】

閲覧用のコンピュータでは、サーバコンピュータに入力されている資料1点1点の詳細を見られるようになっていますが、多くの資料の中から目的のものを探しやすくするために分類方式をとっています。分類には3つの段階があり、それぞれ大分類、中分類、小分類としてあります。大分類と中分類を以下に記します。



【おわりに】

コンピュータによる収蔵品管理システムの利点には、他の博物館の収蔵品管理システムの閲覧を当館でもできる可能性があるという点があります。それは外部とのネットワーク（例えばインターネット）を使うことによって実現します。現在は館内だけのネットワークですが、ほぼ同じ条件がそろっている松代町の真田宝物館と将来はネットワークを組み、お互いに収蔵品の情報を交換できるようにしたいと考えています。もしそれが実現すれば、来館者用のコンピュータから真田宝物館のコンピュータを呼び出し、その収蔵品を閲覧できるようになるでしょう。また、逆に宝物館側の来館者システムから、博物館の収蔵品を見ることもできるわけです。

インターネットが普及し始めている現在、博物館のさまざまな情報を各家庭で閲覧できるようにするのも時代の流れとして、今後必要になってくるでしょう。

（大蔵 満）

●●●常設展示 特別公開 善光寺信仰●●●

だいゆうじ

小諸市大雄寺（小諸善光寺）

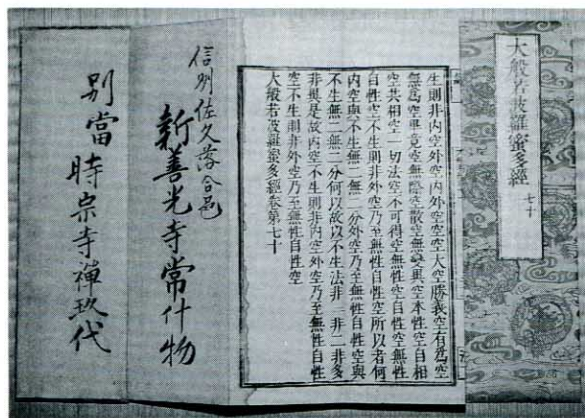
どうぞうあみだによらいりゅうぞうおびりょうきょうじりゅうぞう
銅造阿弥陀如来立像及兩脇侍立像

長野県宝

8月21日(土)～9月15日(水)

写真①は善光寺仏と呼ばれる阿弥陀三尊像の様式で、善光寺信仰の隆盛とともに鎌倉時代中頃から作例が増え始め、全国で約260体以上の模刻仏が確認されています。立志山大雄寺の本尊であるこの像は、初代道雄和尚^{じしゅうじ}によって昭和5年（1930）に佐久市鳴瀬の時宗寺から大雄寺に迎えられたものです。幕末の江戸出開帳の後一時行方がわからなくなりましたが、奇縁により大正10年（1921）に時宗寺に帰山したとされています。

仏谷山時宗寺は文禄元年（1592）の創建で、往古新善光寺・慈寿寺^{じじゅうじ}がありましたが廃堂となり、江戸時代の宝暦年中に旧地より古銭3貫文と阿弥陀仏の金像を掘り出したと『長野県町村誌』にあります。この掘り出された像が本像であり、武田信玄が佐久に侵攻した際に土中に埋められたとされています。時宗寺には火災等のため古い文献は一切無く、新善光寺の歴史もつまびらかではありませんが、近世には新善光寺の別当を務めたとする資料が数点残されています。一つは江戸の大邸江上の書いた新善光寺の扁額。二つ目は安政4年（1857）に江戸神田小柳町の車力・久助が奉納した出開帳の様子を描いた絵馬。三つ目は時宗寺14世の禅玖^{だいはんにんききゅう}が新善光寺の什物として納めた大般若経600巻です（写真②）。時宗寺に残る中世の資料には、弘安2年（1279）の銘のある板碑や五輪塔が本堂裏か



② 大般若経 新善光寺別當時宗寺禅玖



① 大雄寺本尊 像高 中尊 47.5cm
脇侍 各30.0cm

ら出土しています。また小海町松原諏訪神社の梵鐘^{ぼんしゅう}（重要文化財）には（写真③）、弘安2年（1279）に佐久の大井光長が新善光寺に鐘を寄進し、その鐘の駒の爪の下に、寛元2年（1244）7月に本尊阿弥陀如来を、同8月に観音・勢至の一光三尊像の金銅仏を作ったと追刻されています。この善光寺仏が大雄寺の本尊だといわれています。

市町村誌や長野県史にある本像の解説には、中尊の製作年代は鎌倉時代中頃（『長野県史・美術工芸編』）や鎌倉末期（『北佐久郡志』）とされ、脇侍は鎌倉中頃から室町時代と定まっていません。また、本像を新善光寺から時宗寺、さらに大雄寺の本尊とするには資料的制約もあり、研究の余地があります。博物館ではこうした特別公開が、新たな研究のきっかけになればと考えています。



③ 弘安2年 梵鐘

（野ざらしの鐘）松原諏訪神社